



中国がわかるシリーズ11 新という国家の位置付け

ライフネット生命保険株式会社
代表取締役会長兼 CEO 出口 治明

今から約 2000 年前、西暦元年(1 年)のGDPが試算されています。下記の通りです。

漢帝国	26. 2%
インド各国	32. 9%
パルティア	9. 7%
ローマ帝国	17. 2%
倭(日本)	1. 2%

これを見ると、西暦元年(以下、年号は西暦)の世界は四大国(漢、インド、パルティア、ローマ)の時代であったことがわかります。長安では、九歳の平帝が即位しましたが、実権は、外戚である安漢公、王莽の手中にありました。二年、世界で初めての人口調査が行われ、総人口が 5959 万 4978 人と報告されています。首都長安は、25 万人弱ですが、当時は、漢室の陵墓の周辺に七つの陵邑(守陵都市)が築かれていました(陵邑の制度も始皇帝に始まりますが、宣帝を最後として BC43 年、新たな陵邑の建設は廃止されました)。高祖の長陵が 18 万人弱、武帝の茂陵(司馬遷も移り住んだのです)が 28 万人弱と記録されていますので、これらの衛星都市を含めた大長安の総人口は軽く 100 万人を越えていたものと推察されます。間違いなく、世界一の大都市であったでしょう。

インドでは、北部でも南部でも分裂状態が続いていましたが、漢とパルティア、ローマを繋ぐ貿易のおかげで、経済は順調に推移していました。ちょうど、サーンチーの第一塔が完成し、ヒンドゥー教に刺激されて、大乘仏教が興ろうとしていた頃です。パルティアとローマ帝国の間には、平和が保たれ、ローマでは、紀元前二年に国父の称号を得た初代皇帝アウグストゥスの下で、穏やかな時間が流れていました。ローマ市の人口も、100 万人前後はあったとする説もあります。ローマ帝国の東方、パレスティナのナザレでは、イエスと呼ばれる幼子が、四歳の春を迎えていました。日本では倭人が、百余国に分れて争い、一部は、漢の楽浪郡に朝貢していました。

八年、外戚の王莽が、ついに国を奪い、国号を「新」としました。気丈な伯母の太后、王政君は、始



長期投資仲間通信「インベストライフ」

皇帝以来の伝国の璽(皇帝の象徴)を、地面に投げつけて、王莽の忘恩を詰ったと伝えられています。王莽は、儒家思想に忠実な、復古的な政策を打ち出しましたが、地名の改称、7年に4度の貨幣改革、土地所有の制限など、あまりに現実離れしていたので国内はたちまち混乱に陥り、匈奴など周辺の民族も離反して再び勢力を盛り返したのです。

華夷秩序を強制し、匈奴に賜与した印璽を章に格下げ、また、高句麗を下句麗と改める等して他民族の離反を招いたのですが、これでは他民族が怒るのも当たり前でしょう。17年、山東で息子を軽罪で殺された呂母が、県宰を殺して仇を討ちましたが、そのかたき討ちに協力した若者達は、18年に起こった赤眉の乱に合流していったのです。味方の印に眉を赤く描いた農民反乱です。これを、きっかけに、国内各地で反乱が続出し、23年に王莽は殺され、新は15年であっけなく滅んでしまいました。

しかし、この短い王莽政権の間に、儒教の体系化が進み、文書行政が整った中国と、そうではない周辺国との関係が整理されたのです。俗にいう東アジア冊封体制の始まりです。西周が諸侯に祭祀青銅器を与えたように、中国は漢字の書かれた金印や鏡を周辺国に与え続けました。漢字を使用する帰化人等が外交を取り持ったのです。周辺国が漢字、漢語を受け入れれば、中国に同化したことになりませんが、韓半島や倭、ベトナムでは、そうはなりません。韓半島で訓読や万葉仮名の祖形が発想され、漢字を使って他の言語が記録されるようになったのです。要するに、漢語は浸透しなかったのです。

しかし、漢字を受け入れ、読めるようになった周辺国は、中国の歴史に圧倒されました。そして、周辺国がそれぞれの王を一尊とした律令に基づく文書行政を始めます。戦国時代の中国の文書行政開始から1000年以上が過ぎて、それが周辺国に及んでいったのです。かつての東周に比べれば、中国はすでに圧倒的な強国となっていました。中国と周辺国との関係は、戦国時代の東周と七雄のような微妙な関係に転化するのです。(この辺りのことについては、コラム初回「【中国がわかるシリーズ】中華思想とは何か、淵源の有力説は…」を再読してみてください)。

すなわち、周辺国に自らを中心とする中華思想が生まれたのです(京都を洛陽と雅称すること等はその典型です)。なお、韓半島や倭では、速やかに中国の国制が受け入れられましたが、ベトナム南部では、インド文明が、既に浸透していたため、中国を模した国家の成立は、韓半島や倭よりも遅れることになりました。

王莽政権は、一般には時代錯誤的な政権だったと理解されています。確かにその側面は間違いなくありましたが、武帝が儒教を国教とした論理的な帰結の一形態でもあり、また、東アジア冊封体制への影響等を考えれば、その重要性は決して無視できないものだったと思われます。多民族が入り混じった中国では、もともと異民族に対する偏見はほとんどなかったのですが、儒家思想の拡がりとともに、華夷秩序(異民族を差別した上で包摂する考え方で、単純な排除の論理ではあり



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

ません)が次第に形成されていくことになるのです。

「東アジア冊封体制」の冊封とは、冊書(辞令書)により王位や高位の官に任命(封建)することを行います。つまり、中国の皇帝が、朝貢を願い出た周辺国の君主に、その領地に係る王号や称号を与えて独立支配を公認する一方、中国の爵位(王公侯伯子男)を与えて君臣関係を結ぶという国際秩序を指します。周辺国にとっては、漢字圏の、即ち世界の最高権威から公認されたというメリットに留まらず、常に朝貢貿易による経済的な実利を伴っていたため、一般に、朝貢は大いに歓迎されました。

もともと、軍事力に秀でた匈奴や突厥、ウイグルなどの草原世界は、一貫して中国を、世界の最高権威ではなく、むしろ服属国とみなしていたため、実態的には、冊封とは無縁でした。また、草原世界以外でも、中国の史書に冊封が記されていても冊封された側にその記録がなければ、それは、必ずしも実体を伴ったものではなく、むしろ中国側の願望、儒教の公式論に近いものであったとして理解すべきでしょう。